印度學佛教學研究第40巻第1號　平成3年12月

『舎利弗阿毘曇論』の禅定論

田　中　教　照

本論は『舎利弗阿毘曇論』の禅定論が基本的に身念処の修行を基礎におくものであることを述べる。そして，それは，『中部経典』「身念経」に説かれる身念処論に新思想を加えて増広付加したものであることを示すものである。

『舎利弗阿毘曇論』は禅定に関して，主として二箇所で言及する。すなわち，非問分（Apraśnaka）「禅（dhyāna）品」と緒分（Prasthāna）「定（samādhi）品」[1]である。前者はまず経説を論母にあげてそれを解説する形式をとり，後者は定と名づけられるものを列挙し，その意味を解説する形式をとる。形式上は両者に一致す点はないが、内容の一部に共通点を見出すことができる。

禅品では，まず，「定を修するにかくのごときの因縁有り」として，以下の経説とおもわれる[2]ものを引用する。

> 比丘愛護解脱戒，成就威儀行已行処，愛護微戒懼如金剛，受持於戒。
> 断邪命，行正命，善知識，善親厚，善衆，摂諸根門，飲食知足，勤行精進，初不睡眠，離障礙法。
> 如此比丘知断五蓋・心垢損智慧法。離欲悪不善法，有覚有観，離生喜楽，成就初禅行。
> 乃至断苦楽，先滅憂喜，不苦不楽捨念浄，成就第四禅行。（大正 28. p. 619 c-20 a）

これは戒を受持し，根門を保護して静慮を完成する次第を述べたものである。これを解釈するなかにおいて，『舎利弗阿毘曇論』は「已行処」を「若比丘自国已行処，魔不得便。比丘何謂自国已行処。謂四念処也。是自国已行処。」（大正28，p. 620 a）とする経説[3]を引用する。つまり，四念処が自国のように馴染のある行，已に行じたことのある修行の場処ということで，これは，悪魔に利便を与えない行の場処，というのである。ここに，戒の受持すら四念処の修習を前提としていることが分かる。

しからば，戒の受持にたいしてさえその前提となる四念処とはどのような修行であると『舎利弗阿毘曇論』では考えられていたのであろうか。この点に関しては，この「禅品」には言及されていないが，緒分「定品」をみるかぎり，それは

各念処を独立に修して禅定に至るとするものであることが分かる。緒分「定品」は五支定を詳説するが，そのなかで「欲悪不善法を離れ，覚有り，観有り，離生の喜楽ある初禅行を成就する」方法として，「道品一支道に広く説くが如し」といい，「道品一支道」に説かれる身念処をあげ，あるいはまた，法念処の内容たる五蓋・六識・七覚支・四諦などをあげるから，ここは身念処や法念処が初禅行を成就する前提となる行と考えられているのである[4]。

四念処は身・受・心・法と修し念処の完成に至るという経説もあるが，身念処あるいは受念処など各一の念処だけでも独立して完成とみなす説も経典に説かれる[5]から，ここは身念処が独立の意義を与えられていると考えてよい。ちなみに，非問分「神足品」の「以身定心」の解釈も非問分「道品」一支道の身念処論を依用するから，これは『舎利弗阿毘曇論』に共通する基本的な禅定論となっている，というべきである。

そこで，非問分「道品」一支道の身念処論をみるに，その内容の概略を示せば，

(1)　四大色身をもって身体を観察する三説
(2)　行住坐臥の知（経説２）
(3)　去来前後屈伸の正知（経説３）
(4)　入出息の知（経説１）
(5)　足より頂に至る不浄観（経説４）
(6)　身の四大所成観（経説５）
(7)　食住食集観
(8)　尽空俱空観
(9)　九瘡津漏門観（ここまで「念処品」とおなじ）
＊1.　衆縁和合観
＊2.　人仮設観
＊3.　六根仮名我観
＊4.　五蘊無我観
＊5.　世間苦思惟
＊6.　身苦思惟
＊7.　因住思惟
＊8.　因假思惟
＊9.　行縁思惟
＊10.　生法思惟

*11. 老法思惟

*12. 病法思惟

*13. 死法思惟

(10) 塚間の死屍観（経説６，「念処品」では内外身観のみ）

これは，「念処品」と同一の所説をベースに＊印の部分を付加したものである。「念処品」の身念処は＊印部分が欠如しているだけ旧い説とみなされよう。しかるに，「念処品」の所説は(1)四大色身をもって身体を観察する三説と，(7)食住食集観，(8)尽空俱空観，(9)九瘡津漏門観を除けば，説順は異なるものの，『中部経典』の「身念経」（Kāyagatāsati-sutta）の所説と内容的に一致する[7]（右記に経説と指示したところ）。『中部経典』の「身念経」の内容構成は，以下のとおりである。

(1) 入出息の知，

(2) 行住坐臥の知，

(3) 去来前後屈伸の正知，

(4) 足より頂に至る不浄観，

(5) 身の四大所成観，

(6) 塚間の死屍観

(7) 四禅（洗浴師，池泉，蓮華，白衣の比喩）

(8) 身念の不修と修の三比喩

石塊と湿土，乾薪と火，空瓶と水

糸球と閂，湿薪と火，満瓶と水

(9) 身念の通達と作証の比喩

充満の水瓶，四角池，四街の車

(10) 修習の十功徳

*1 不楽・楽の克服　*2 怖・畏の克服　*3 忍受　*4 四禅　*5～10 六神通

ここで身念処が四禅へと結びつけられて説かれていることは注目に値する。なぜなら，ここの四禅に関する部分が『舎利弗阿毘曇論』非問分「禅品」の四禅説にも同様にみられるからである。すなわち，(8)を除いて(7)の四禅成就の四喩，(9)の三喩，そして(10)の＊５～＊10六神通である。「禅品」は最後に漏尽におきまりの「我生已尽，梵行已立，所作已弁，不受後有，随所能入」と述べ，四禅の果報を示しておわっている。ということは，『舎利弗阿毘曇論』においては，この「禅品」において修行道の最終が説かれているのであり，四禅において六神通の果を

得ることがもっとも重要視されている，といえよう。それは四禅の重視に外ならない。そして，随所に身念処が説かれることは『身念経』のように，それが四禅の成就へと導くからであり，そこに身念処の説かれる意義を認識すべきである。

かくて，『舎利弗阿毘曇論』は修行道関連の所説を各品で散在的に示すが，それを統一ある思想の一部として認識するためには，『中部経典』の「身念経」の所説を背景にみておくことが必要である。この経説をもってすれば，『舎利弗阿毘曇論』は四禅を重視する修行道を有し，四念処は各念処が独立していて，身念処だけで四禅へ進入できるという理解であることが分かる。これは，説一切有部の四念処の理解とはことなる。

『舎利弗阿毘曇論』が身念処論に新たに付加した部分についての考察は紙幅の都合上別稿に譲る。

1）還梵は E. Frauwallner, Abhidharma-studien, IV. Der Abhidharma der anderen Schulen, (WZKSO, bd. XVI, 1972) pp. 134-5. を参照した。

2）これにもっとも近似する経説は漢訳では『雑阿含経』第801経で，安那般那念の修習に益する五法をあげるなかに出る。しかし，そこでは四禅に言及しない。『分別論』「禅分別」の論母はこれと非常に近似するので，むしろこちらを採るべきであろうが，それはパーリ文としては『中部経典』の Gaṇaka-Moggalāna-sutta の一部抜粋のようである。よって，現存の経説に見出せないものの，経説に由来するといえる。

3）この前に説かれる六非已行処は『分別論』にも解説されており，初期アビダンマ期に定着した解釈と思われる。そして，已行処を四念処と解釈する考えは『相応部経典』(SN5, p. 148.) にも『雑阿含経』第617経にも説かれている。

4）ここに身念処と法念処だけを支定とするのは元来身念処が基本であったのだが，『舎利弗阿毘曇論』が法重視の傾向を示し始めたときに法念処も受け入れたのではないか。そのことは，身念処論が経説に付加した部分が四大色身などのような抽象的な法の観察をもって身念処の修習とすることから予測される。

5）たとえば，『中部経典』「入出息念経」(MN 3, 118. Anāpānasati-sutta) には，各念処から念覚支の修習円満を説く。

6）大正 27 p. 618 b-c.

7）漢訳の『中阿含経典』「念身経」は漢訳の『中阿含経典』「念処経」と同じく，地・水・火・風に空・識を加えた六大界とし，離生喜楽などの四禅も念処観の結果ではなく，他の観察法と同様の観察法とするなど，『舎利弗阿毘曇論』ともパーリともことなる。

＜キーワード＞　舎利弗阿毘曇論，禅定，念処，身念　（武蔵野女子大学教授，文博）